

仮設住宅の継続的な支援の実践 in 釜石

震災から 4 年を経過する被災地では、仮設住宅の集約や復興住宅への移転が始まっている。これらは何度目かのコミュニティの解体と再編成を伴い、住民の不安や疲労度も高い。集約や移転後もコミュニティを維持し続ける気力や、コミュニティ形成のためのノウハウの蓄積が急務となっている。

甲子仮設住宅は平成 28 年の夏頃に集約されるため、住民の移動が起こる。その時に仮設住民が孤立することを防ぐには、住民の一人ひとりがコミュニティを形成する力を身につけることが重要になってくる。しかし、住民の中には自治会のイベントや活動に参加をしない人がいて、特に若い世代はあまり来ないため、コミュニティ形成のノウハウが普及していかないのだという。以前お話を聞かせていただいた時、自治会の方々は「仮設住民の“気持ちの体力作り”が必要だ」と強く主張した。

そこで、私たちが微力ながらご協力をさせていただくこととなった。月に 1 度、仮設住宅住民へ向けて情報紙を発行して自治会活動を積極的に広報するとともに、若者目線の記事で若い住民たちの興味・関心を喚起していく。そして自治会活動に参加する住民を増やすことで、復興住宅への移転後も、それぞれの場所でコミュニティ形成の担い手として活躍することを目指す。また、それらの活動を通じて、東京の大学生らに関心を広げ、震災から 4 年目を迎える被災地で必要とされる新たな支援を見出すことも目的とする。

2014 年 12 月 27 日から 12 月 28 日にかけて、私たちは岩手県釜石市甲子仮設住宅で国内研修を行った。27 日は、甲子仮設住宅自治会の方々にお会いし、翌日の餅つき大会の準備と情報紙についてのミーティングをした。28 日は餅つき大会の設営・準備を手伝い、呼び込みや配布作業を行った。

27 日の餅つき大会の準備では、豚汁に入れる野菜を切る作業や、届いていたかき揚げやカイロの住民への配布作業を行った。作業は皆で手分けして取り組み、その合間に自治会の方々は、仮設の状況を私たちに説明して下さった。かき揚げを配布する時には、自治会の方々と共に、1 軒 1 軒住民の方々のお宅を回った。今まで何度か仮設住宅を訪れたことはあったが、実際に声がけをさせていただいたのは初めての経験。私は、突然来た大学生が訪問して良いのかと思い自治会の人に尋ねた。すると自治会の方は「若い人が笑顔で訪問した方がみんな喜んでくれる」と言った。実際に訪問をしていると、それぞれの住宅の状況は様々だった。明かりが灯っているにも関わらず、玄関に出てこない人がいるかと思えば、仕事で忙しいと言ってすぐに家へ引っ込む人もいた。だが、笑顔で出てきてくれる人、私たちとの会話を楽しむ人もいた。

夜の情報紙作成のミーティングでは、自治会の方々が私たちの話真剣に耳を傾けて下さった。「社会批評やキャンパスライフ、学生の視点からみたものなどが掲載されていると、未来の日本を背負う若者たちの姿を想像することができ、自分たちも未来に向かおうという気持ちが湧いてくるため、さらに有意義な情報紙となる」などの意見も伺った。そこで、

学生による社会批評や、コラム、お年寄り向けの俳句・短歌コーナーや、住民同士によるリレーインタビュー、住民の一声を集めたコーナー、料理レシピ紹介、その都度行う予定のイベントの感想などを集め記事にしていくという方向性を決め、有意義な話合いをすることができた。

28日は、運営のサポートやチラシ作成、呼び込み、お餅配布、住民の合唱サークルとの共同合唱などを行った。チラシの作成については、国内研修を実施する前から取り組んでいて、レイアウト、配色、見易さ、情報の選択などの面で調整が難しかったが、NPO法人handsの菊池隼さんのアドバイスによって仕上げることができた。餅つき大会には、呼び込みの成果もあってか40人ほどの住民が出てきてくれた。皆笑顔で会話をし合いながら、住民の方々と協働して作りあげたお餅と豚汁を食べていた。大会では、多田純也さんによる獅子舞披露、大久保正人さんによる尺八演奏、住民の方々による合唱も行われ、会場は大いに盛り上がった。合唱は、住民さんたちの合唱に、即興で私たち学生も混ぜていただいた。歌は全然分からなかったが、一緒に歌って下さる住民の方々はあたたかかった。

2日間を通して印象的だったのは、住民の方々、そして子供たちの笑顔だ。1軒1軒お宅を訪問した時には暗い顔をしていた住民の方々も、住民同士で話している時には皆明るい表情をしていた。何度もコミュニティの崩壊や大切な人との別れを経験し、今ここに生きている人々。将来の安定や安心が約束されない生活の中で、不安を抱えながらも懸命に生きている。そんな人々を少しでも後押しすることができたら…。住民の方々に対する気持ちが高まった2日間だった。

今回私はこの8人のグループのリーダーとして活動した。何度も相談にのり、励ましてくれた7人のメンバー、湯浅先生、菊池隼さんに心から感謝している。今回のこの活動は、甲子仮設住宅との「つながりの始まり」となった。私たちはまだまだ経験やノウハウに乏しい大学生であるが、幸い、高齢化の進み若者が少ない仮設住宅では、「若者が来た」というだけで歓迎してくれ、喜んでくれる雰囲気がある。自治会の方々も、私たちの情報紙や発想力に期待をして下さり、相談にも乗ってくださり、本当にありがたい。だが、つながりは始まってからが一番重要だ。これからは大学での会議を重ね、情報紙の作成や取材、イベントの企画について話し合っ、計画を立て、意識を統一していく。そしてより一層甲子仮設とのつながりをより強くし、私たちに継続できる支援について考え続けていきたい。

仮設住宅と関わりを持つということは、少なくとも「住民の方々の生活に踏み込んでいく」ということだ。この事実は、決して軽い気持ちで考えてはならず、活動にも慎重かつ確実に取り組んでいかなければならない。そのため、一人ひとりが自覚を持ち責任を果たしながら、チーム全員で活動を継続させていきたい。そして、今は13名という活動人数だが、これからは呼び掛けを積極的に行い、活動規模・可能性を広げていこうと考えている。